

本土決戦下の漁村～民防空監視哨と布良沖の駆潜艇撃沈

豊崎榮吉（館山市布良、船大工「船吉」棟梁）

1928（昭和3）年に館山市布良の船大工の家に生まれたが、家業は長兄が継いでいたので、次男の私は1943年富崎尋常小学校高等科を卒業して中島飛行機という軍需工場の青年学校に行った。教育期間が3か月だったが、兄が戦死したので急きょ実家に戻ることになった。

1944年6月、富崎青年学校2年次で富崎民防空監視哨に勤めた。青年学校は、勤労青少年の夜間学校だった。監視哨が非番の時は漁師などして働き、夜に勉強した。監視哨では哨長と副哨長の4人は軍経験の大人がいて、青年学校から動員された14～18歳の18人が哨員となり、3班に分かれて1日交代で哨に入った。班内で2人ずつペアを3組作り、立哨・連絡・炊事などを交代でこなした。通信連絡や炊事・待機用の30㎡の小屋1棟があり、太平洋が一望できる固定式の対空双眼鏡が2台と、その脇に雨や曇りの爆音で機種を識別するための聴音壕という穴があった。飛行高度や機体の色、爆音で、機種を識別する訓練を徹底的に受けたが、壕で識別できたことは一度もなかった。

1945年春の駆潜艇の惨劇が忘れられない。駆潜艇とは潜水艦を見つけ出す探索装置を装備して、沈めるための爆雷を投下する特殊船のこと。日付ははっきり覚えていないが、あまり寒くなく、波も穏やかだった。10時頃だったと思うが、伊豆半島方面から米軍機B24が飛んできて、監視哨の前方での駆潜艇は攻撃された。爆音と硝煙が上がり、駆潜艇は一瞬のうちに真っ逆さまに沈んだ。それを見ていた子どもたちも「ああ爆沈だ」と騒いだ。私はその様子を双眼鏡で見ている、哨長は本部に「布良沖で駆潜艇訓練中に撃沈」と報告するのを聞いた。

哨長の命令を受けて漁港に行ってみると、地元の漁船に救助された大勢の将兵が運ばれていた。憲兵が来て、警戒線をつくってはいなかった。星野さんという警防団長が一人で怒鳴りながら指示し、血だらけの負傷兵を住民が手当てした。生存していても重傷者や軽症者がいて、そのなかに濡れてぐったりしている者がいた。そこで海女たちが裸になって、濡れた男たちを抱いたのには驚いた。布良の女の力が発揮されたのを、私は初めて見た。昔から時化で漁師がよく死んでいるが、こんな風にして布良の海女が温めて助けようとしたのかと思った。重傷者の収容に海軍のトラックが来た。多数の将兵が死傷したにもかかわらず、惨劇の記録は残っていない。駆潜艇の名前など不明のまま。布良沖は海軍の演習場となっていたが、館山砲術学校も近いため米軍機がよく偵察に来ていた。そんな危険な場所で駆潜艇が訓練していたとは思えない。何をしていたのだろうか。

後日、平砂浦上空でP51が被弾し墜落。操縦士がパラシュートで脱出、着水すると米軍の潜水艦が浮上し救助した。いずれも双眼鏡で目撃した。目の前の海は既に米軍が掌握していた。

⇒【証言の会（録）P.40参照】